



Title	若者とカルト：書き換えられる記憶のゆくえ
Author(s)	櫻井, 義秀
Citation	現代のエスプリ, 490, 150-159 カルト 心理臨床の視点から
Issue Date	2008-05
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/35588">http://hdl.handle.net/2115/35588</a>
Type	article (author version)
Note	『現代のエスプリ』490号「カルト 心理臨床の視点から」2008年5月刊に掲載
File Information	sakurai-2.pdf



[Instructions for use](#)

若者とカルト一書き換えられる記憶のゆくえ一

北海道大学大学院 櫻井義秀

## 1 自己・物語・記憶

若者の特長は自意識の強さである。多少尊大であろうと可能性を秘めているが故に許される。ところが筆者のように中年期を生きるようになると、自分がしたいことよりも自分にできることとできないことをわきまえ、控えめに自己主張することになる。時々、この大人しいおじさんよりも温和しい学生達をみると、君たち夢をもっと語りなさいと言いたくなる。言いつばなしでは困るが、他の人に聴かれることで自分に自信が出てきたり、夢の実現に責任を感じたりして、予言の自己成就となることもあるからだ。

自意識が強いというのは自分が何者であるかを他者との差異において強く印象づけたいという意志の表れだろう。若者は社会の座標軸に位置を持たない分、自分らしさをファッションやライフスタイルのような自己表現で示そうとする。思想や運動に傾倒したという前世代の言い分もよくよく考えれば時代のモードに乗っていたのだし、今時の若者は自己を趣味や嗜好品で物語るという時代に生きているだけのこともかもしれない。ともかく、用いるツールは何であれ、自己を物語る人がいること、語りを聴くものたちがいることは社会の構成要件である。他者に対して自己を開き、つながっていくことが物語るという行為であるならば、濃密でかつ運命的な絆をつくる宗教において語る行為は極めて重要である。

近年、信仰という宗教行為を特定の宗教文化や教団の言葉により自己を物語る行為として捉え直す宗教研究が注目を集めている。菊池・芳賀は真如苑という仏教系新宗教（一九三六年立教、信者数約八〇万人）において、青年信者が自らの信仰形成を弁論大会において発表する行為を綿密に調査した。教えにより信仰の道筋が示され、先輩信者の指導、体験を語る場の慣習的実践によって、本人の信仰的自己物語が編集され、バージョンアップしていくさまが示された。そのように獲得された自己物語に沿って、さとしや気づきに敏感な信者の日常感覚が醸成されるのだろう。信仰とは主体的に自己をソフトな権力作用に委ね、リアリティの組み替えをなしていくことに他ならない（菊池・芳賀、二〇〇六）。

従来の新宗教研究では、信仰が語られる場面（座談、体験談、証し等）において、信者が教えを受容するに至った個人的経験を聞き漏らすまいと耳をそばだてたものだ。しかし、語り手によって、教団によって、物語の編集には随分と違いがあることも分かってきた。教団誌の編者が信者の体験談集に朱を入れてバージョンアップを図るという例から、信者が主体的に物語の組み替えを生涯にわたって行う例までバリエーションがある。教団によっても編集の度合いは異なるだろう。経験を積んだ研究者であれば、語り手の話に編集の痕跡を読み取ろうとするのだが、初学者は語りを事実として受け取りがちである。

もちろん、このようなことは宗教の語り特有のことではなく、ライフストーリーというものは現在の心境や事実認識から過去の出来事を再構成して語られるものなのだ。しかも、聞き手に応じて語り方も変わる。尋ねられて初めて甦る記憶もある。そうした記憶の断片がストーリーを得ることで有意義な連関を持ちはじめ、鮮やかになるのである。

歴史を物語る行為である歴史認識は、まさに集合的な記憶である。同じ史実を前にしてなぜかくも歴史認識が異なるのかと、日中、日韓の歴史認識の隔たりが政治問題化する。

しかし、忘れられない被害の記憶（理不尽な悲惨さ）と忘れない加害の記憶（自ら招いた悲惨さ）の差に加えて、集合的記憶の覚醒装置（歴史教育、記念碑、史料館の展示等）が両国ではかなり違う。筆者は今年のゼミで『日韓交流の歴史―先史時代から現代まで』（歴史教育研究会編、二〇〇七）を読み、学生とスタディー・ツアーで韓国に出かけたが、それぞれの国の教科書を読み、記念館を歩いてようやく実感できる歴史認識の差に気づいた。

さて、若者の自意識からはじめて、自己物語論、歴史認識まで話を広げすぎたかもしれない。本題である「若者とカルト」に話を戻そう。カルトの信者もまた自己を物語っているのであり、カルト集団も集合的記憶としての現状認識と未来展望を持っている。物語が編集されること、共同体によって組織的になされることは、カルトであれ、宗教組織であれ、国民国家であれ変わりはない。カルトと他の社会集団との間にあえて線引きをすれば、編集作業の恣意性・暴力性である。現代の人権感覚や法制度において許されない程度に、信者の記憶の書き換えやリアリティ感覚のゆさぶりがなされていないかどうかが問題だ。

次節では、カルトに入ってしまった人達の自己物語への希求がどのように時代や社会によって作られたものであるのかを予め説明しておくことにしたい。信者は特殊な人々ではない。一般市民と変わらない日常生活と価値意識を有していた。しかし、不幸にしてカルトの勧誘に出合い、取り込まれたのである。なぜ、少なからぬ若者がカルトに走るのかという疑問には、現代人、とりわけ若者世代に効果的な誘引を説明することで、深入りしてしまふ潜在的な可能性を示唆できる。最後の節において、個人の心理特性や事情と関係なしに、教団が誘引を作りあげることがあり、動機づけられた信者は自己物語や社会への認識が書き換えられて別のリアリティを生きることになることを順に説明していこう。

## 2 成長の時代から不安の時代へ

人が自己の物語を作る際、参照されるべき物語がある。つまり、文化や社会階層、時代に応じたモデル・ストーリーを参照しながら、可能な範囲で自分らしさを作り上げるしかない。筆者はタイの地域開発も研究しているのだが、社会の開発・発展という考え方、自己の開発・成長というライフスタイルも国家の開発主義政策によって作られたモデル・ストーリーであることを確認している。日本においても、成長・発展する産業社会と、それを支える勤勉で向上心に富んだ人間形成がモデル・ストーリーだった。国民生活に関する世論調査（内閣府）によると、「これからは心の豊かさやゆとりを求めたい」という人が「まだまだ物質的な面で豊かさを求めたい」という人を初めて凌いだのが一九七九年であり、二〇〇七年現在では二倍の開きになっている。経済的な豊かさから心の豊かさへとモデル・ストーリーの転換が徐々に図られてきたのが一九八〇年代であった。しかし、何が心の豊かさかを示す社会政策論者は少なかった。

一九八五年に男女雇用機会均等法が施行され、女性が様々な職場に進出するようになる

と、女性の仕事は家計の補填から社会的な自己実現とみなされるようになる。仕事は金を稼ぐなりわいから自分らしさを発揮するツールとして自己物語の構成要素になった。心の豊かさに自己実現という要素が加わったのである。ここで少なくとも人々が難問に直面する。実現すべき「自己」とは何か。人々の関心は社会から自己の内面に向かい始める。

一九八〇年代に教勢を拡大した新宗教は、新・新宗教と呼ばれた。先に述べた真如苑や阿含宗、幸福の科学、一九八四年にヨーガ・サークルから始められたオウム、様々な自己啓発セミナーが該当する。戦後復興期に教勢拡大した新宗教が貧病争の解決をめざして心直しや福祉活動に取り組んだのに対して、新・新宗教は個人の覚醒や能力開発を霊能力・神通力に求めるような傾向が強い（大村・西山編、一九八八）。開発されるべき領域が経済から心に移ってはいきたものの、新・新宗教においても成長し続ける自己や世界という観念がまだ維持されていた。

ところが、一九九〇年に入りバブル経済がはじけて日本経済は低迷し、新自由主義経済政策がとられ、グローバルな大競争時代に適合的な社会への組み替えが進められた。二〇〇七年に非正規雇用者（一九九五～二〇〇五年の間に正規職に就けなかった若者達含めて）は正規雇用者の半分に達する。地域間・階層間格差が増大した。楽観的な人生観や右肩上がりの社会観が失せたのは当然として、正規雇用者も長時間の労働とストレスに苛まれ、セラピーと癒しを求める時代に移行する。凶悪事件の背景説明や社会批評に精神科医が登場し、家族や教育の問題も心理療法的発想で処方箋が出されることが増えた。癒しに宗教文化（仏教や巡礼ブーム等）やスピリチュアリティ（占い、ヒーリング等）が利用された。

心理療法や癒しの文化にひそむモデル・ストーリーを見つけることは難しい。近代（市場経済やリベリズムであれ、批判としての社会主義思想であれ）への信頼を打ち砕いたものは、ポストモダンの思想などではなく、停滞した社会で苦悩する人々の生活実感だろう。中国やインド、東南アジア等、成長し続ける社会では、シンポ・成長のモデル・ストーリーに対する人々の信頼は今でも強い。人々の野心の総量は日本を遙かに凌ぐだろう。

成長神話であれイデオロギーであれ、自己物語が準拠しうる大きな物語が失われた。個人を社会に縛り付けるしがらみや温情主義的な共同体を棄て、自由に自己を実現してきた日本人がいざ社会の推進力を失ってみると、社会のリスクに丸腰で立ち向かわざるを得なくなっている。ゆとりや個性尊重の教育も受験競争や管理教育があったからこそ対抗的な物語たり得た。精神分析療法も家族や社会による個人の抑圧があつてこそ。自己物語の自由な選択や編集をサポートするというナラティブ・セラピーは、必ずしも物語の相対性や複数性に不安を覚える患者（一般の人々）に安心を与えられないだろう。

こうしてみると、保守派のバックラッシュであれ、インターネット上のプチ・ナショナリズムであれ、根っこは同じである。自分が選び取った物語に安心できない。だから、その語りを聴いてくれる人々を強く求め、応じないものを非難するという態度にでる。ネット社会におけるフレーミング戦略（非難に価するという烙印を押した上で非難をさらに煽る）とその心理も同様だろうし、現在のカルトの行動様式にも通じるものがある。

まとめると、モデル・ストーリーが失われているが、なお、自己実現という自己物語への圧力が残存する社会において、物語の参照枠もなくサポートしてくれる重要な他者も得ていない人達にとって、カリスマによるモデル・ストーリーの提示や、物語る行為を交換しうる共同社会は立派な誘引になる。熱烈な布教や反対者に対する攻撃には心理的に自己を安定させる効果がある。カルト視される教団の設立年や経緯は様々であっても、現在このような集団で生活している人々、特に若者の心理には共通した不安と解消の機序がある。

### 3 カルトに構築される記憶と自己物語

カルトの勧誘手法や教化の仕方は、社会的影響力の行使、マインド・コントロールという説得の心理学によって随分と説明されてきた。しかし、ここでは記憶の書き換えに焦点を絞り、カルトがいかに入信理由という動機を作りあげ、組織の救済論により信者の自己物語を編集しているかについてのみ解説しておこう。便宜的に、以下の教団類型を設けた。

#### 「癒し系・靈感商法カルト」

二〇〇七年一二月、神世界と称するグループが教系列の販社組織を抱え、販社ごとにヒーリングサロンを開店し、占い・癒しに始まり、慢性疾患に悩む人達の体質改善や家族・職場トラブルの解決等をうたって、神霊治療後に百数十万円のカミサマの書『力』や、各種ヒーリング・グッズを販売していたことが報道された。スピリチュアル・カウンセリングと称して霊能師（といっても資格があるわけではない）が一時五千円相当で電話相談を行うサイトは相当数あり、スピリチュアルなセミナーやグッズの見本市である「すぴこん」等含めれば、ヒーリング産業は無視できない市場規模を持つ。

この系列のモデル・ストーリーに従えば、あなたの抱えている問題は通常教育・医療・生活・法律等では解決できないほど**大変な問題**なのだと不安を煽り、特別な解決法を求める心境に至らしめるということに尽きる。そして、今までのやり方では**何の効果も得られなかった**という記憶とだからこそ**新しく始めなければならぬ**という動機が作られる。占いや癒しの技法が問題解決の主たる方法に変わり、際限のない金銭負担が発生するが、問題解決の糸口に留められるべき占いや癒しの術を濫用したものだといえる。金のない若者は客にならないが、ローン返済のために従業員として働かざるを得ないものも出てくる。

#### 「覚醒系・自己実現型カルト」

オウム真理教や自己啓発セミナーに典型的である。**今の自分に満足してよいのか、本当の自分と向き合おう**と若者達の変身願望をくすぐり、肉体を酷使する行で変性意識を生じさせたり、セミナーで精神的な限界状況を生じさせたりする。日常生活より遙かに強烈な情動を伴う体験に、信者はこれこそ本物と思い、**今までの人生は虚しく、偽りの人間関係であった**という記憶が作られ、**真実の自己、本当の人間関係**を目指して指導者の教えに従うよう動機づけられる。もちろん、経験を積んだ修行者や心理療法家であれば、特殊な意識や治療空間に人を留め置くことの弊害を認識し、日常生活における実践を説くのだが、カリスマは取り巻く必要とするし、カルトは信者を囲っておきたいのである。

人生模索中で意欲と体力に恵まれた青年層にアピールするモデル・ストーリーであり、打ち込む対象と指導者を選び損ねる不幸がなければ、何事かをなした人達であろう。

「使命感系・世界変革型カルト」

統一教会の教祖は再臨のメシアを称し、神の王国（地上天国）実現の企画を次々に打ち出すが、そのための人的資源と資金調達の方法が必要になる。正体を隠した伝道や靈感商法、献金強要が違法行為とされた。伝道には二種類ある。学生や独身の勤労者の場合、**今までの家族や男女関係は偽りのものである**という記憶が作られ、**真の父母**（文鮮明教祖夫妻）と**神の子**となる祝福（合同結婚式）を志向するよう動機づけられる。中高年の主婦に対しては、姓名判断や家系図診断を通して**家族問題や病気等は先祖の悪行による家系の因縁であった**という記憶が作られる。そして、霊石の壺購入や献金により運勢転換が図られることが強調され、自分が**氏族（家系図上の親族）メシアとしてたち、献身していくべき**ことが使命感として植え付けられる。教会組織は信者の使命感を持続させることに腐心し、巡回師と称するお目付役兼カウンセラーを派遣したり、意識の低下した信者には修練会参加を呼びかけたりする。

カリスマ的な教祖による小規模教団がカルト運動に転換するには、信者の強烈な使命感と旺盛な宣教活動と資金集めが必要になるが、統一教会に限らず、仏教系の新宗教でもこのような事例が散見される。使命感を打ち出すのは昨今のしらせ・脱力世代にはうけないのだが、熱い生き方を模索する良質の青年も一定数いるので、その層が引き込まれていく。

「救済系・ファンダメンタル型教団」

聖神中央教会をはじめ、福音系キリスト教会において主管牧師の強力なカリスマ・指導性が発揮され、教勢拡大を遂げることがある。宗教指導者の神格化と信者の無批判的従順が過ぎると、時に信者への性的虐待を含む暴力的支配が生じる。このような教会へ足を運ぶ人々は、かつて日本の新宗教に入信した人々同様、貧病争に悩み苦しみ、行政の相談や教会の牧会では満足できずに、強力な道徳・規律、霊的癒し、共同体による救済を求めている。その意味で入信の動機付けは必要ないが、この種の教団になじむためには、**二元論的な価値観（世界は善霊と悪霊の戦い）を内面化し、神―代理者―教会という指導の階梯に従順に従う信仰が形成される必要がある**。従わなければ、**地獄行き、滅びの道しかない**ということが様々な指導の場面で説かれ、宗教的現実感を体得したもののだけが残る教会は相当に集団的凝集性が高く、内部告発や批判が起こりにくい体質になる。カルト運動化する前の新宗教にも同様の特徴が認められよう（櫻井、二〇〇六）。

現代の若者が自らこのような教会の門を叩く可能性は低い。しかし、両親がメンバーであり、子供がこのような環境で成長し、後に教団を離れた時に困る事態となる。自由、自己決定の経験がないため、自分では何もできない。価値の相対性や妥協といった観念が分らないので他人とコミュニケーションができないのである。

4 カルト問題とは何か

カルトというのは元来敷居の高いところであり、看板が出されておれば一般市民がおいそれと入れる場所ではない。普通に考えて支払う金額と得られる効用は釣り合っていないので、予めそれが分かっている人も好きこのんで入らない。店としては看板とお品書きや値段を外しておき偶然に入る客を待つか、客引きの呼び込みで通行人を丸め込んで連れてくるかのいずれかである。但し、難しいのは元来が悪徳商法という店だけではなく、店主・従業員の関係や、大人しすぎる客のために店主が増長し、擬装含め対価に見合わない商品・サービス提供をなす場合があることだ。さらに困ることは監督すべき所轄官庁や法の整備が不十分であり、客は当面自衛するしかない。外食しなければ何の問題もないのだが、専門店でのどを潤し、舌を楽しませたいという欲求をなくすことも無理だろう。

多少戯画化してみたが、カルトに入るといえるのはこのようなものである。正体を隠されたり、言葉巧みに持ち上げたり、脅したり、泣きを入れたりされることで、一般市民が元々入りたくもない店に入らされてしまう。原価の一〇倍取られたら暴利バーだが、宗教とみなされると一〇〇倍でも救われたとその時点で思ったのならよいではないかと裁判所に言われるのだ。靈感商法も一般市民のままに欺されれば被害だが、信者になつて献金してしまえば宗教行為として不問に付される。医者を騙って治療を行えば医師法違反だが、患者が民間療法であることを了解して高額治療費を支払うケースに厚生労働省は介入しないのと同じである。信者は自由意志で信じているのだから、信教の自由を尊重しなければならないという。しかし、幾つかの教団では**自発的に服従する**信者がいる。

本稿では、①若者は生きるに価する自己の物語を書き始める時期に生きていること、②現代はモデル・ストーリーが失われたため物語の参照枠が得にくい時代であること、③カルトは物語の作成支援を装い、強力な編集システムにより信者の記憶の書き換えまで行うことを見てきた。こうした事態は現代に限ったことでもなければ、カルトに限った話でもない。しかし、人が人生観や社会観を構築する際、どこまで記憶の書き換えや物語の編集に第三者が介入してよいのか、現代日本社会という足場で考えてみる必要がある。

身体の損傷に及ぶ物理的暴力や資産の収奪とみなせる詐欺等は明白な違法行為だし、それを露骨に実践したオウム真理教の無差別テロや統一教会の靈感商法の問題性は誰でも分かる。しかし、信者にしてから高額な献金を強要する統一教会、或いは擬装サークルを通じて布教や勧誘を行う新宗教や自己啓発セミナー等、当事者や家族、関係者という立場で問題に巻き込まれてみないとなかなか分かりにくい。人生という自己物語の編集に介入するカルトの問題を指摘したが、カルト問題への理解を深めていただければと思う。

文献

大村英昭・西山茂編、一九八八、『現代人の宗教』有斐閣。

櫻井義秀、二〇〇六、『「カルト」を問い直す』中央公論新社。

芳賀学・菊池裕生、二〇〇六、『仏のまなざし、読みかえられる自己―回心のミクロ社会学―』ハーベスト社

歴史教育研究会編、二〇〇七、『日韓交流の歴史―先史時代から現代まで』明石書店。